光の洗礼

上口司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光の洗礼

【Ｎコード】
Ｎ１３４９Ｈ

【作者名】
上口司

【あらすじ】
ケン族の酋長の跡取り息子として将来を嘱望されていたテイフは、兄の陰謀により村を追い出されてしまう。失意の中聖職者の道を進むこととなった彼は、放浪の旅を続ける内に、やがて世界の創世を伝える神話に隠された重大な真実を解き明かすこととなった――これは、この世界で初めての国家・ハシュナウクを築いた一人の王の生涯を描いた物語。

第一章　元服（前書き）

本格的な長編小説は初めてなので完結するかは分かりませんが、できる範囲で書いていきます。

第一章　元服

序章

ハシュ族の要衝である岬野（ファイリク）に程近いケン族の村では、酋長アートの妻が陣痛を迎え、岩窟の中で出産に向かっていた。

西部砂漠から吹きつける砂嵐は先日からここぞとばかりに集落を襲った。襤褸切れを継ぎ合わせただけの民家は、立ち所に倒潰しそうにもなった。

しかしその日は荒れた天候が一区切りし、乾季（ウォイム）から雨季（フォウク）への移り目を見せつつあった。治まりかけた風は僅かに海沿いに生える草木を撓らせ、打ち寄せる波を揺らしていた。

当時の村の中は、血族内での後取りを巡る諍いに歯止めがかけられない状態だった。

ケン族の酋長はそれまでに八人の子を授かったが、男児はその内四人だった。そして、その中でも嫡男のタームが、事が運べばその侭酋長の地位を相続するはずだった。

またもう既に彼を中心とした利害関係も、まだ十三の元服を向かえていないにも関わらず完成されようとしていた。

ところが今回生まれくる子供が男であった場合、状況は変わってくる。何故なら五人目の男の子が生まれることになるからだ。

「五」はケン族などの信仰では完全な数とされており、長の子である時それは単なる数字以上の意味を持つ。これは彼らの属する人種である河人の迷信に基づくものだ。

具体的には、第五子は祭事を取り仕切る宗教指導者（ネル）になるのが一般的だった。しかし過去には無条件に神聖視され、民の支持を集めて酋長になった例も存在していた。

以上のような理由から、五番目の男子の誕生は大きな波瀾を呼ぶ虞

があった。
村人たちは夫人が子を身篭った当初から、この天の思し召しが吉と出るか凶と出るかについて、選りすぐりの呪い師を外から呼び寄せて占わせてきた。しかしそれも、とうとう明白な答えを得られぬ侭だった。

当の夫人はどうかと言えば、次第に心持も悪くなり病気がちになった。酋長や親族からの期待が重なったことが一番大きな原因だった。また往時続いていた、河陵（デウレイフ）に対する河人（デウ）ハシュ族の分離独立紛争は、彼女の憂鬱に益々拍車を掛けた。
河陵とは、山州という巨大な島に暮らす河人（デウ）と陵人（サナク）（陵人の言葉で陵（レイフ）はサナクという）の二大人種の総称だった。そして四百年前の河人と陵人の戦争が終わって山州の東岸に陵人、西岸に河人が住み着くようになってからは、ケン族は比較的安泰として過ごしてきた。ところが約十年前、ハシュ族は積年の宗教観対立からかつての対立を蒸し返し、陵人に戦争を仕掛けたのだった。これが再び河人と陵人の間に大きな軋轢を生み出した。
ハシュ族は最後の戦争の後も度々紛争を起こしてきたが、その度に河陵数多の部族を束ねる最高権力者、覇王（オフォス）直属の軍隊によって制圧されてきた。
今回も一度は第二十四代覇王、チェタス率いる精鋭の王立軍が、ハシュ族を圧倒的な数の差で敗った。しかしその後も彼らが抵抗を続けた為に戦いは泥沼化した。
長らく共にあったこの二つの民は、それらの戦争を発端として次第に引き裂かれていったのだった。
そしてケン族は二つの人種の間で揺れていた。多くの民が自衛のため兵士として駆り出され、物資や食糧は不足して村は困窮した。何時終わるとも分からない戦乱への不安から、民の心も荒むところとなった。
やがて村では、新しく生まれる子が地上に災いを呼ぶという、何の

拠り所もない噂が流れるようになった。中にはかの女子を胎児諸共殺してしまえという、過激な者まで現れた。　これに夫人は非常に心を痛めた。
勿論そういった檄を飛ばす者どもの大半は、新たに跡取り息子が生まれることで不利益を被ることを不服としていただけだった。
酋長であったアートはこれを耳にして一計を案じた。彼は村人に対して己が邸宅へ召集の伝令を出した。寄り合いを開く為だった。
以前まで村では定期的に寄り合いが開かれていたのだが、混乱が続いていたため有耶無耶にされていた部分があった。しかし彼は、重役を全員呼び寄せてこれを強行したのだった。
　久しぶりに行われた寄り合いは恐らく、これまでの中で最悪の雰囲気であっただろう。新しい命の誕生を祝福する酋長側の重鎮と、タームを推している派閥との間で睨み合いが続いた。そして、ケン族始まって以来の亀裂が浮き彫りにされた。
皆が焚き火を囲み押し黙って何も言わない中、彼は静かに石槍を杖に立ち上がり、沈黙を破ってこう諫めた。
「もしお前たちの願いが一つなら、我が妻をこの場で殺そう。しかしそれは、皆がそれぞれの手と足の指を一本ずつ切り離して、四本にするというならばの話しだ」
しかしそれでも流言は止まず、夫人はやがて体調を崩していった。頬は痩け髪の艶はなくなり、食事を受け付けないことさえあった。
何より妊娠中であった為、胎児への影響が最も危惧された。
初めは薬師の強い奨めで夫人を岬野の産婆の下へ預からせることが計画されていた。
ハシュ族の村へ行くことに対して反対も出たが、今は夫人の人命が優先ということで全員が合意した。
そしてその日は、遠く離れた岬野へ連れて行くために、家臣、従者衆を引き連れて、夫人を御輿に乗せて移動させることになっていた。所が旅路の途中で、突然夫人の陣痛が始まってしまった。急を要していた為に、偶通りかかった海沿いの巨大な鍾乳洞の中で急遽分娩

態勢に入ったのだった。

天幕を張る準備も間に合わず、夫人は御輿から降ろして若人衆に担がれた。大臣達は洞窟の入り口を取り敢えず掻き集めた手勢で固めた。ごつごつとした岩だらけだったため、肝腎の夫人を寝かせる場所を探すのに手間取った。

何とか平らな一枚岩を見つけると、直ぐさま輿から夫人を降ろした。薬師が立ち会うことになったが、実際はそれだけでは手が足りず従者たちも加わった。

夫人の顔は青冷めていた。あれではとても出産後までもたないと、助産の経験のある女僕は申し出た。薬師たちは顔を見合わせたが、結局胎児の安全が最優先されることになった。

暫くの間、夫人の苦しげな声だけが静寂とした洞窟に響き、整然と立ち並ぶ村の若者たちの間にも緊迫とした空気が続いた。

すると先ほどから強く吹き続けていた風が止み、岸壁に砂が擦れる音が止まった。波は穏やかになり、砕け散る水飛沫は沖合いへと向かって後退りを始めた。どうやら風の切れ目に入ったらしい。

それと同時に、天空から聖獣（ロイナ）の雄叫びが聞こえた。ふと水平線へと視線をやると、彼らはここから約一タップ（十二キロメートル）離れた海上で、十数匹程度の小規模な群れを成していた。波と風の音で掻き消されていたようだ。そしてその内の数匹が群れを離れ、こちらへゆっくりと向かってきている。

聖獣は小型船ほどある巨大な空を舞う獣だ。一部の人々はこれを「死の遣い（ジョシュロー）」として忌み嫌っていた。河人には鳥葬の習慣があったためだ。疎らに散らばっていた連れの者たちが一斉に騒めき始めた。

彼らは河人たちが移住して百年ほどで山州にも飛来するようになったそうだ。そしてこの一帯は、長老（アイファン）の縄張りであったようだ。死の匂いを嗅ぎつけて岩窟までやって来たらしい。

彼らの餌となるのは人間やその他諸々の生物の主に死肉だった。死にかけている生き物を見つけると、上空に留まって様子を見ながら弱るのを待つのである。そして丁度良い頃合を見計らって、集団で襲いにかかるのだ。

だが彼女はまだ、その胎内に子を孕んでいる。むざむざと殺されるのを、黙って見ているわけにはいかない。

気がつくと、彼らの内数匹はもう目前にまで迫っていた。

「彼奴らめ、ここまで来おったか。者ども、武器を取れ！　奥方様をお守りしろ！」

一人の大臣がそう叫んだ。若人衆が槍を手に取った。彼らは鍾乳洞の入り口付近で一斉に陣形に並び、迎え撃つために構えた。もう今は派閥争いをしている場合ではなかった。皆が等しく生命の危険に晒されていたからだった。

彼らはその不気味な外見に目を見張った。全身は剛毛で覆われ、ぎょろりとした手の平ほどある大きな二つの眼球と、その下につく鋭く黒い嘴。近くで見れば見るほど恐ろしい生物だった。

彼らが恐れ戦いていると、一匹が此方へ向かって咆哮し、こちらへと飛んできた。群れの数匹が彼に続いた。そしてこちらへと急降下したかと思うと、長大な二つの触手を振り回し一人の兵士を掠め取ろうとした。かくして戦いの幕は開けた。

前列の男たちは叫び声を上げ、槍を振り回し彼らを威嚇した。後列はこちらへ入れずに宙を漂っている彼らに狙いを定め、弓矢を放った。

しかし彼らも負けじと、次から次へ仲間を二、三匹の編成にして送り込み、車懸りで攻め込んできた。流石は殊類の霊長と称されるだけはあり、非常にやり方が賢かった。こうして両者の間に激しい応戦が繰り広げられた。

一方洞窟の奥では、正に嬰児が生まれようとしていた。しかし夫人

の体力は限界に達しつつあった。先ほどまでは力を入れる度に苦悶の表情を浮かべていた。だが回数を追うごとに表情も段々と少なくなった。
聖獣もそれを見据えてなのか、夫人がこと切れそうになればなるほど攻撃の手を強めた。
やがて少しずつ頭が見え始めた。夫人の声が呻き声に変わった。外ではまだ戦いが続いていたが、武器の損傷が激しく負傷者も出ていた。
聖獣は相変わらず攻略を諦めようとしなかった。夥しい数の疣状の突起が並んだ嘴を大きく開き、涎を垂らしながら襲い掛かる様は、まるで何かに取り憑かれているかのようだった。
もうこれ以上保たない。兵士が一人、二人と疲労から倒れこんでいく中だった。

澱んだ空気を切り裂くように、赤ん坊の産声が空洞に木霊した。とうとう生まれたのだ。大臣達が急いで薬師と女僕に駆け寄った。まだ完全に出きってはいないらしい。
長い長い空白が続いた。やがて赤ん坊は静かに生み落とされた。正真正銘の男の子だった。
夫人は程なくして息を引き取った。彼女は先ほどまでの苦痛は嘘だったかのように穏やかな表情をしていた。周囲にいた皆が胸に手を当て、僅かな時を夫人の冥福への祈りに捧げた。
しかしほぼ同時に入り口の兵士たちが陥落し、聖獣が彼女目掛けて突進してきた。
従者たちが回収できるだけの遺物を掻き集めて袋に入れると、赤ん坊を取り上げたばかりの女僕にそれらを託した。
そこにいた全員が兎に角逃げようとして急いだ。赤ん坊は産湯を漬かう間も無く、母の腕に抱かれる間も無く母親から引き離された。殺される。恐怖がその場にいた全ての人の心を満たした。

しかし聖獣は赤ん坊を一瞥すると、ぴたっとその動きを止めた。そして、その場にふわりと着陸したのだ。
さらにその聖獣が動きを止めると、洞窟の入り口にいた他の聖獣たちも一旦上空に舞い上がった。若者達は先ほどまでずっと続いていた戦いから、突然解放された。
彼らは訳が分からないという様子で自失していた。
「おい、そいつを殺せ！　どうした、早く仕留めないか！」
一人が震える声でそう叫んだ。するとじっとしていた男達は、まるで魔法が解けたかのように動き出そうとした。
「待て！」
一人の聖職者（チャーク）が身を呈して彼らを止めた。彼は村で最高齢の宗教指導者（ネル）だった。
男達が唖然としているのを後目に、彼はしゃがれた声で威厳を利かせてこう言い放った。
「かの者をよく見ろ」
若者たちも、大臣達も、従者達も、皆が一斉に聖獣の顔に注目した。先ほど襲い掛かってきた聖獣のような敵意は、それには見られなかった。
「怒りは鎮まった。もう攻撃はしまい」
それは紛れもない事実だった。聖獣の黒い瞳は赤ん坊の方に向いていた。

赤ん坊は女僕の腕に抱かれ、只管何も知らずに泣き喚いていた。今はただその声だけが、一切衆生の命の灯火が懸命に燃える様を代弁しているかのようだった。
そして、直ぐ傍にはこと切れた赤ん坊の母親が横たわっていた。何が起きたかなど、言葉で説明しなくても分かるであろう。
しかしその時聖獣は、それを慈愛でも掛けるような冷静な目つきで見つめたのだ。何が聖獣を留まらせたのか、後々になっても宗教指導者でさえ頭を傾げるほどだった。

だが聖獣は毛布に包まれたその子の首に、ケン族に代々伝わる聖獣の胃石の首飾りが掛けられているのを見ると、再び普段の感情の無い目に戻った。
これはケン族の酋長の子が、成人の儀式として聖獣狩りを行うことを所以とするもので、彼らを殺した際にその腸から奪い取ったものだ。

違う世界に生まれた時から、哀しみはもう既に始まっていたのかもしれない。

種族は違えど、子を愛する気持ちは同じだとでも言うのだろうか。
それとも単に首飾りに恐れを見出しただけなのだろうか。真偽の程は分からなかった。
しかしほんの短い時間、本来仇敵同士である両者が互いに気を静めて向かい合えたことは変わらない。
やがて聖獣は仲間を引き連れて水平線の彼方へと去った。かの夫人はその場で正式に葬儀が執り行われ、洞窟の中に設えられた神輿の上に供物を添えて手厚く葬られた。この時ばかりは誰も彼女を罵ることはなかった。
彼女はこの時になって漸く、安らかに眠ることができるようになったのであった。

その日生まれた子は河人の言葉で「満潮」を意味するテイフと名づけられ、正式な名をテイファート・ルーケンとした。文武に秀で仲間を慈しみ、ケン族の酋長からハシュ族の王となった彼は、各地に散らばっていた河人の種族を纏め上げるための抗争に巻き込まれていった。
やがてこの地上で初めての国家を創成し、肇国の祖として玉座に君臨することとなったこの男――
人々は民も獣も全て従えて大将軍の名を馳せた彼を、その偉業を讃

えてハシュ族の偉大な王・エーシャン・ルーハシュと呼んだ。
しかしこれは彼がまだそんな己が運命を知る由もなく、奇妙な出生により村人から魔物の子として怖れられていた幼き日々の話しである。

第一章　元服（ジェアット）

テイフがはっきりと思い出せる中で一番古い記憶は、六歳の時巡礼祭に参詣したことだった。
巡礼祭（ショウトジック）を間近に控えた日の昼下がり、テイフは家の近くにある海岸沿いの草原で、一人虫を追いかけまわしていた。
草原、と呼んではいたが、それは凡そ広くもなく身を隠す茂みも無い程のものだった。
そして荒れ果てた飛び地の間を、太陽の光にも似た色のさらさらとした砂が永遠と埋めている。山州は全土に渡り広大な砂漠に覆われていた。特に西岸側は、一旦内陸に入れば生物の影すら見かけられないような不毛な土地が広がった。
テイフが砂丘の狭間を駆け、波を見て喜ぶ様子を見ながら一人の年老いた男は思わず微笑んだ。テイフは先ほどもその男の前で叫び声を上げた。そして御河童のように切り揃えた髪を靡かせて、はしゃぎながら走っていた。
男は古くなった木製の杖をつき、刺繍の少ない白を基調とした簡素な衣装に身を包んでいた。髪は完全に白髪で、口からは長い顎鬚を生やしている。
彼はこの村の宗教指導者（ネル）で、名をウォーシュといった。
ケン族の集落からは、直接水平線を望むことができるぐらい海が近かった。
テイフの目付け役を任されたウォーシュは、祭事で手が塞がっている時や勉強の時間が終わると、こうして開いた時間をここに来て遊

ばせるのが常だった。

テイフは元気な子だった。そしてこの年にしては利発で、非情に聡明だった。タームは遊び好きで人から何かを学ぶことを拒んだが、テイフは話しをよく聞く子だった。

そうは言っても、子供は無邪気なものだ。つい数年前までは夜毎に泣いていたのが嘘のようだ。彼は杖を持ち直して、テイフに目を細めた。

まだ乳児だった頃、テイフは乳母の乳を飲もうとしなかった。無理やり口を付けさせると大声を上げて泣いたことを、彼は今更ながら思い出した。

あの時は母親が余程恋しいのかと皆が心配したが、そんなものは全ての始まりに過ぎなかった。その後、彼は周囲の厳しい目線に晒されながら、テイフを育てることになったからだ。

彼は改めてテイフの成長ぶりに目を見張った。もう六歳になるのだ。

村はあの子の生誕で二分されてしまった。

あれ以来村の中では何かにつけて、決め事や会合がある度にお互いが衝突しあちこちで機能しなくなっていた。足の引っ張り合いはそういった場に留まらず、村人同士の付き合いや村の役職決めにも及んだ。

下らない諍いは子供たちさえをも巻き込んでいた。母親同士さえも、どちらを村の未来を担う酋長にするかで対立した。例え幼いとはいえども自分が属する派閥の構成員であるとして、親が子供の友人関係にまで介入する始末だった。

問題の当事者であるなら、一悶着有るのは当たり前だったかもしれない。

彼は元気に遊ぶテイフを眺めながら、昔のことを思い出した。

それは集落からより奥まった所にある農園の側で、テイフ他の子供

たちと一緒に遊ばせていた頃のことだった。
テイフは往時まだ四歳であったが、もう外で遊ばせることもできる年頃であったため、彼はできるだけ普通の村の子供と遊ばせる方が良いと考え、テイフを農園やその付近の家の子と交友を持たせていた。
何より農園主だったテップはウォーシュの幼馴染で、その意味でも安心だった。
ケン族の集落は海側から防砂の為の土塀と垣根に囲まれた居住区と、そしてそれを内陸側から取り巻くように作られた農園で構成されている。
農園では主に陸稲（ユイ）などの雑穀が育てられていた。そもそも土地の水捌けが良過ぎて水耕栽培には向かなかったが、乾燥に強い作物が植えられた。
しかしそれら全てを合わせても、ケン族の集落は端から端まで半タップも無く、本当に小さな村であった。

最初に村の子供たちと一緒に遊ぶようにとテイフに言いつけた時、テイフは今までにないほど綻んだ笑顔を見せて喜んだ。そして、他の子供たちも彼が酋長の子であることを何も気にしている様子は見受けられなかった。
　この年ではそんなことは関係無かろう、ウォーシュはそう思って暫くの間、様子見はしたが特に心配はしなかった。
　しかしそんな生活が続いたある日のことだった。
ウォーシュはその日一日中予定が詰まっていて、テイフの相手ができそうになかった。本当は農園主に面倒を頼むつもりだったが、畑の管理用に直ぐ側に立っている野営用の天幕の中を覗いても人が一人もおらず、生憎外出しているようであった。
仕方なく街の子供たちを呼んで、この子と一日行動を共にするように、と念を押して言った。
彼は初めあんな幼い子供たちと一緒で大丈夫かと心配したが、それ

より若い聖職者の指導や豊漁の祈祷等で忙しく、暫しテイフのことを忘れていた。
やがて時間は飛ぶように過ぎていき、日が落ちかけた頃になってテイフを連れに戻った。
子供達の姿が見えてきたが、テイフは集団と少し距離を置いて、一人農園の木の下に座り込んでいた。明らかに元気が無い様子だった。
彼は朝に会った子を見つけて話しを聞こうとしたが、震えるばかりで何も答えない。他の子も同じだった。
ウォーシュはくすんだ目をしたままのテイフを、心配しながら手を引いて家に戻った。
そして自分の部屋に一旦入って、袈裟から着替え居間に戻った。
テイフは乳母にすがり付いて泣いていたが、ウォーシュに気付くと涙をぼろぼろ零しながら、顔をくしゃくしゃに歪めて走って飛びついてきた。
テイフは赤く目を腫らして、藁を編んだだけのけばけばした粗末な部屋着の布地も構わずに、小さな顔をウォーシュの太腿に何回も擦りつけた。そして、母上はどこだ、母上はどこだ、とかすれた声で言っていた。乳母が、「母上様はお亡くなりになられたのです。霊魂となって光石を越え、中浦へ戻られたのです」と言って慰めても聞いている様子はなかった。
その後は嗚咽を漏らしながら、譫言のように何かを言い続けた。そしてそのまま声が枯れるまで延々と泣き続けた。
ウォーシュはやはり何かあったらしいと悟った。そして、あの場所にテイフを置き去りにした自分の愚かさを恥じた。

後でウォーシュが農園主から聞き出したことであったが、数日前からテップは連日、自分の息子が例の酋長の子と遊んでいることで、妻と口論になっていたらしい。
そしてその日、彼女の親族であるとある有力者の一人から夫婦は呼び出され、ターム側に寝返らぬかとの話しを、土地を貸すことを条

件に勧められたというのだ。
彼女はそれを聞くや否や酋長側から手を引くと言い出した。両親から強く迫られたためだった。
そのことで夫婦が家に帰りながら喧嘩をしていると、畑の近くに子供たちが遊んでいるのが見えた。すると彼女は、夫の制止も耳に入れずに息子を無理やり連れて帰ろうとした。
テイフはその時彼女の手を掴んで止めようとした。すると、彼女はその場にいた子全員に怒鳴りつけたというのだ。
「あんた達、この子は聖獣に襲われても喰われなかった化け物だよ！　生まれてこのかた悪霊に取り憑かれてるんだ。近付くんじゃないよ！」
彼女はそう罵声を浴びせながら、抜けてしまうと思うぐらい思い切り息子の手を引っ張った。テイフが力なくその場にへたり込んだ。
すると彼女の側にいた子供たちの中に、一緒になって囃し立てるものまで現れた。
何と言う浅ましい言動だろう。ウォーシュは、彼らは子供相手にそのような事まで口にするのかと、恐怖さえ感じた。
前からそういう話は風の便りほどに聞いてはいたが、まさかそこまでとは関知していなかった。子供たちは大人がそのような汚い言葉を発する度にそれを真似て、同じようなことを言うようになるのだ。
静かな怒りが彼の心に募っていった。

更にその後、今度は周囲にいた子供たちが遠ざかり始めた。テイフは子供たちに声を掛けようとしたが、視線を合わせようとする度に皆が顔を違う方へ背けた。
テイフはウォーシュが来るまでただ目を宙に泳がせながら、只管地べたに膝を抱えて一人で座っていたという。
もうこれは見るに耐えないほど痛々しかったと、農園主は声色を低くした。そして家内には自分が説得しておくということと、その時何もしてやれなかったことを悲愴な顔をして深く詫びた。

ウォーシュはただそれを聞いて俯き、派閥争いがここまで激化していることに軽く眩暈を覚えた。
彼の心をやり切れなさと不甲斐なさとが、干潮の浜に押し寄せる海水のように漲った。そして同時に、胸の奥底から溶岩の如く湧き上がる憤りを抑えることができなかった。
あの子が何をしたというのだ。
この年の子供にまでそんな宿命を背負わせるのか。
彼はすすり泣きを続けるテイフの背中を、年老いて土色の斑点の浮き出た手を伸ばして抱き寄せ、ただ黙って撫でていた。

そんなことがあってウォーシュは、大人以外誰も来ない浜辺でテイフを遊ばせるようになった。
テイフに子供たちと関わりを持たせることも、こうして諦めてしまった。あれから派閥争いは少々治まってきた。しかしそれでも、此方にいる方がずっと気が楽だった。
あの子は自分の母親が、自分が生まれてきた際に死んだことを知らない。
しかし一部の村人達がテイフを嫌っていることぐらい、テイフもその空気を感じ取っていただろう。
一人で家に留守番させようとすると、仕切りに知らない従者を嫌がってついてこようとする。昨日の夜も一回寝た後に、厠に行きたい、と言って何回もウォーシュを起こして付き添わせた。
これも彼の何かしらの不安を代弁しているのではないか。
だからこそ、自分があの子の最後の受け皿になってやらなければならない。アートにテイフの目付け役と任命されたときから、彼がどんなことが有っても貫いてきた信念だった。
しかしその時ウォーシュはテイフが自分の母親のことを知ってしまうのを過度に怖れて、早いうちに忘れてくれることを愚かしくも願い続けていた。

テイフは相変わらず波と戯れていたが、疲れたのかこちらに戻ってきた。
砂丘を駆け上ってきたテイフは砂浜にいる時も小さく見えたが、ここまで来ても彼の腰ほどの背丈しかなかった。
彼が袈裟の裾をたくし上げてしゃがみ、視線を同じ高さにまで落とした。するとテイフは徐に海の方を指差した。
そこには砂丘などと比べたら遥かに高い、巨大な山を持った一つの島があった。五タップは沖にあるらしく、かなり距離は有ったがその大きさは見てとれた。
「爺、あそこにある島は何というのだ？」
「あれは殻島（ロウフ）に御座います。平州との海峡の島々の中では最も大きな島で御座います」
ウォーシュは杖を使って砂に絵を描き、図示しながら説明した。テイフは子供らしい、澄んだ瞳を輝かせていた。
「人は住んでいないのか？」
「あの島は三百年の昔より聖獣（ロイナ）たちの塒（ねぐら）に御座います。人間の住まう地には御座いません」
テイフがしっかり聞いている様なので、彼は次から次へと自分が若い頃に学んだこの辺りの地理に関する知識を話した。
「この近海には無数の島が有り、広大な群島を形成しております。
我々の住む山州以外にも、北州、平州といった巨大な島は存在しておりますが、この数百年は人が足を踏み入れたことは無いそうで御座います。
それぞれの名の謂れは、山州には天上山脈（ガトフォール）という島を南北に大きく貫く山が有る為、平州は平地と湿地が多い為との話しで、北州に至っては最北にあること以外はあまりよく分かっていないそうです。
因みにあの島の最高峰である岩山（ジャイク）は、まるでアンガンのように大口を開けた洞窟をその水際に有しており、その名の由来となりました」
「そうか、他の島へは渡った人はいないのか」
テイフはそれ以上のことは訊かずに、再び海辺に戻って行った。

もう大分言葉が分かるようになったが、最近はあれこれと色々なことを尋ねるようになった。彼はテイフが学びに興味を示しているに感心していた。

彼は自分が青年の頃、山州西岸へ一聖職者として留学しに行った当時のことについて思いを巡らせていた。
今年の巡礼祭には中浦を訪れられるのだろうか。彼はふとそんなことを思った。その日は、河人の他の村に行っていた酋長が巡礼祭のため戻ってくる予定になっていた。
山州中央部、天上山脈（ガトフォール）の麓に水を湛えた広大な湖である中浦（モアンゲール）は、かつて人類の祖とされる三大聖徒が降り立った地だった。その後湖畔には彼らを合祀する神殿が建設され、河陵（デウレイフ）全体にとっての聖地となっていた。
彼はその昔、一度だけ中浦を参詣したことがあった。
その不思議な情景は今でも目に焼きついている。神殿は湖の中ほどにある中州の上に、まるで水に浮かんでいるかのように造られていた。そして白く塗り固められた表面の煉瓦が、光を反射して光沢を放っていた。
そして彼が今までどんな建物よりも巨大で荘厳だった。
「一生に二度はない絶景だ」
留学先で世話になった陵人、チャガル族の宗教指導者の言葉を思い出した。
しかし内紛の所為で、彼の以後数年して河人たちは神殿に入ることを禁じられた。彼はケン族の中で最後の参拝者になった。
かつて広府（ビルチェン）の学院へ派遣されてから何十年という年月が過ぎようとしていた。
やがて村に戻ったウォーシュは、その学院での経験を買われてすぐさま当時後取り候補であったアートに仕え、地元の教団との関係に翻弄されることとなった。
　そして今、ウォーシュはケン族最高の地位の一つである宗教指導

者と、アートから引き続いて第五子テイフの目付け役を同時に受け持っていた。
はたと気が付けば、顔には深い皺が刻まれ、髪はすっかり白髪になってしまった。彼は今年で六十二になった。
老いるに連れ、時間が経つのは益々速くなる。彼はかつて自分の師が言った言葉の意味が、ここにきて解かるようになった。

西の空が端の方から段々燃えるような橙色に染まってきた。
彼は沈みかけた太陽が浸かっている海の方を見やった。
　遥か水平線までずっと続いている光の道が、砂浜まで押し寄せていた。眩しそうに佇むテイフの後ろには、釣り合わない程長く黒い影が伸びた。
その時テイフは手を伸ばして、降り注ぐ光線の源を掴み取ろうと必死になっていた。
幼い頃はああいうことをよくやった。昔、十にもならない時分には、友人たちと追いかけっこをしたり、不謹慎にも神話の話しを遊びにしたりした。
河人の祖と伝わる三大聖徒の一、パルンが嘗て手にしたという掴まれた光・ビモポイトビットハシュは、河人の中に今も宿り続けていると伝えられている。
しかしそれは同時に我々の首を絞めているということなど、あの子には未だ分かるまい。
彼は穢れを知らずに生きていた時代を、夕日を体いっぱいに浴びて走る子供のテイフの姿に重ね合わせていた。

　夜、酋長の邸宅には大臣たちが久しぶりに集まった。巡礼祭について酋長から全体へ話があった為だった。
　酋長は古より伝わる儀礼服を着て、物々しい出で立ちで彼らの前に立った。
「今年の乾季は、高城山（エウシュ・ケウクロイト）を登り聖地巡礼を行う。

特別な事情の無い限り大臣は全員、その他成人男子もなるべく同行を願いたい。村人は私も親族を引き連れて参加するつもりだ。この所は戦が比較的落ち着いておるため、儂はケン族全体で参ることとしたいと思う。

儂が地方を訪ねて各部族の長に伺いを立てたところ、フォイフ族やムシュ族などが参加する意向を示した。

またハシュ族の王エアは、掴まれた光を受け継ぐ者たちは皆がこれに馳せ参じるように、との旨を我々に伝えてきた。

各地に四散した河人たちが一同に会する機会だ。粗相の無い様に、皆がそれぞれ自分の一挙一動に注意するよう心掛けよ。

出発は三日後だ、それまでに旅支度を終えよ。異議の申し立ては今夜中にするように」

酋長は大臣達を見渡しながら、よく通る声でそう言った。

「存じ立てまつり御座ります」

側近の大臣達が一斉に地面に跪いた。

酋長は久しぶりに村へ帰ってきていた。ずっと諸侯との協力関係の調整のため、各部族の村を訪問していたからだった。

しかし派閥の一部の者達は未だに彼に反発することもあった。

実際酋長の連絡が終わった後も、まだハシュ族のような凋落した部族との悪縁を断たないのかとか、河人はもう陵人への服従を受け入れただろうという声が一部の大臣たちの間から上がっていた。

巡礼祭（ショウトジック）は河人たちによって昔は毎年開かれていたものだが、高城山山頂付近にある岩を中心に作られた聖跡を参詣することを主な目的として、先祖の慰霊なども行う一大行事だった。

しかし河人の殆んどの種族は、陵人からの圧力でハシュ族との関係に見切りをつけており、この行事も河人の同族意識を昂揚させるとして学院から危険視されていた。そしてこの二十年ほどは戦争のこともあって、五年おき程でしか開催できない状況にあった。

かつてはハシュ族も含め河人全体が陵人からの分離を主張したこ

ともあった。だが一度は済んだ問題を蒸し返しているハシュ族は、河陵(デウレイフ)全体にとって目障りでしか無かった。
もう三百年以上前から、ハシュ族は未だに学院と神殿に服従せずに孤立していた。
しかしそんな中、ケン族がハシュ族、その他の河人、陵人の全てと和平関係を維持しているのは奇跡的だった。

ウォーシュはテイフと共に家路についた時、酋長と大臣達との口論の声は外まで聞こえていた。
するとテイフが光石という言葉に反応して、「我も母の魂が戻られた地に行くことができるのだな」と呟いた。彼はそれを聞いて複雑な気持ちになった。
しかしとにかく論争は暫く止みそうに無かったので、彼は取り敢えず、まだ就寝には早かったがテイフを部屋で寝かしつけることにした。
昼間よく運動した所為か着替えるのも用を足すのも忘れて、テイフはすんなり眠りに落ちてくれたので非常に助かった。
彼はテイフが寝ているのを確認すると、部屋の中で様子を窺いながら待機して、大臣達が帰った後で酋長のアートの寝室を訪ねた。
「親方様、私で御座います」
「入れ」
凛々しい顔つきをした中年の男性がそこには座っていた。寝巻きに着替えてはいたが、まだ起きていたようだ。
彼が日干し煉瓦の土壁で仕切られた部屋に入ると、入って左の蒲団の上に酋長のアート、そして右側にはタームとその乳母がいた。
どうやらタームのことで乳母が気を使って父親の所に来させていたらしい。また何か問題を起こしたのだろう。
彼は人払いを請うかどうか迷った。
「用件が有るならば早く申せ」
酋長はその二人をあまり気にしていない様子だった。

彼も実際乳母と子供ではあまり気にかけることもないと思って、話を始めた。
「この度は長い旅路のご足労を厚く御礼申し上げます」
「何、我が同胞である河人の友好とケン族の安泰のためならば、大した距離ではない」
「とんでもないことで御座います。ケン族の代表としてお方様はご立派にお勤めに御座います」
彼は最初、酋長に現在の情勢について話を伺った。
「ハシュ族は現在どのような状況に？」
「彼らは当分の間戦いは控えるとのことだ。物資も兵力も尽きてきておるしな。
当分は十七、八年前のような全面戦争は発生しないだろう。
しかし学院と覇王（オフォス）は彼らへの追及を続けている。我々が他の河人の代行として、今まで仲裁に入ってきたが、それも限界に近付きつつある」
「依然として、我々の出方に彼らも大きく左右されるということですか？」
それを聞くと、酋長は少し何か迷うような顔つきになった。
「それは当然のことだ。しかし儂は、彼らが未だにあの稀代の悪王としてその名を連ねているレントを崇め、何時までも抵抗を続ける理由も分からぬが、覇王がその王立軍を持ち出してまで彼らを潰しにかかる所以も分からぬ」
「それは単に、一連の叛乱に最期の砦であるハシュ族を従わせてけりをつける為ではないでしょうか？」
「いいや違う。ここで問題にしたいのは、覇王と学院が何故、学院建設当初からの伝統である、各部族の自治権を重んじなくなったかということだ」
確かにそれは彼も留学していた頃から既に感じてはいた。
あれから河人がハシュ族以外皆降伏して和議を申し立てても、学院と神殿はそれさえも受け入れなかった。そして河人の地位は以来貶

められたままだった。
覇王（オフォス）――それは河陵全ての部族を統括する王で、中浦の神殿を御座所としている。彼は天意によって選ばれ、昔は部族の区別無く選出されていた。
そして学院は覇王から任命を受けた学長が管理する強大な組織で、陵人たちのその首都であり拠点である広府（ビルチェン）に置かれていた。
学院は降臨暦二九八年に初代覇王によって建設された。それは部族間抗争の絶えなかった当時、学問こそが平和を齎すという御意に由ったとのことだ。
現在は測地術や天文学等について日夜研究が行われており、河陵（デウレイフ）の全ての知恵と技術はそこに結晶していると言っていい。しかし近年は、特に陵人たちが強大な権力を背景に、覇王への忠誠という名目で各部族に対して強い姿勢に出ていた。
地方の聖職者はそうした背景で、村で学ばせるよりは学院や神殿へ派遣される場合が多かったのだ。彼もかつてその一人だった。

「しかし河人は、ハシュ族のレントを最後にずっと覇王を輩出していない」
話が難しくなったので、乳母に構ってもらっている隣のタームを見ながら酋長はそう言った。彼はタームを見て、もう十八の男が何をしているのだろうと憐れみを抱いた。
「河人には住みにくい世の中になった。全く、そなたがかつて忠告した通りであった」
「然様で御座いますか」
「いずれにせよ、もう少し探ってみない分には、学院が一体何を恐れているのかなど分かるまい」
酋長は卑屈そうに太腿を叩いて、欠伸を漏らした。彼はかなり長い時間話し込んでいることに気がついた。
彼はそろそろ寝る時間になるから部屋へ戻ろうかと思い立った矢先、一番聞きたかったことの方を言うのを忘れていたのに気付いた。

「親方様は今年の巡礼祭には親族を全員お連れになる御積りでしょうか？」
「そうだ」
「テイフ様についてですが……やはりご子息も全員ということですか？」
酋長は何だ、その話かと言って、安心しろと言いたげな表情を見せた。
「もう六歳であろう。あの子も自分の足で歩ける筈だ。今年からはテイフも連れていく」
「然様で御座いますか。真に喜ばしいことに御座います」
これに彼が心底嬉しく思ったのは言うまでもない。
テイフが生まれてからずっと、酋長のアートとその僅かな側近だけが彼の味方だった。彼にしてみれば、一歩酋長の邸宅から出れば、誰が手を組んでいるかなど把握し切れなかったからだった。

しかし、彼がテイフの旅の身支度を始めようと考えていた矢先、横から冷や水を頭から被せるような声が若い男の耳に入ってきた。
「我が母を殺したあの魔物も連れて行くのか？」
一瞬にして三人は凍りついた。声の主は紛れも無く、タームだった。
タームはテイフが生まれた時からずっと嫌っていた。タームは不機嫌な様子を露にし、不貞腐れたような喋り方でこう続けた。
「父があれを息子と認めるなら、私は行かぬぞ。私は魔物の親も兄弟も持った覚えはない」
「ターム、言って良いことと悪いことがあろう！」
おろおろしていた乳母よりも先に口火を切ったのは、酋長のアートの方だった。アートは、タームのことになると感情的になりやすかった。
乳母は血の気が引いた顔をして、頭を地面に下げた。
「も、申し訳ございません」

「そなたが謝るところではない！　タ―ム、どういうつもりだ！」
「何を今更言うのだ、事実であろう。のう、ウォーシュ？」
「そのようなことは御座いません。何とぞ撤回して頂きたい」
ウォーシュは冷静にそう言ったが、アートの怒りは頂点に達しようとしていた。
「お前、自分の兄弟に何という物言いをしているのか分かっているのか！　テイフにも、いやウォーシュにも謝れ！　この空けが！」
「父親とて妾は騙されぬぞ。良いぞ、何回でも言ってやろう。我が母はあれを孕んだ所為で精神を病み、化け物に体を蝕まれてこの世を去った。
あいつが……あいつが我が母を殺したのだ！」
ところがだった。本格的な喧嘩になる前に、酋長が目線の先にある何かに目を止めて何かを言いかけた口を噤み、突然顔を蒼白にした。
乳母も酋長の視線と同じ方向に目を向け、あっと言った。
ウォーシュは明らかな異変に気が付き、彼らがいる位置とは反対にある部屋の入り口の方へと目を向けた。

そこには寝ていたはずのテイフが立っていた。
ウォーシュは驚きの余り大きく目を見開いた。そしてそれと同時に、硬い土瓶が地面に落ちて砕け散るような絶望が胸の内を広がっていった。
テイフは何も言わず、ただウォーシュと乳母と彼の父親、そしてタ―ムの方をじっと悲しげな目で見詰めていた。
そして、一言こう呟いた。
「爺、私は母を殺したのか？」
ウォーシュのひび割れた唇は小刻みに震えた侭、何かを口にすることが出来なくなった。
「私の母は、病気で私が乳飲み子の時に死んだのではないのか？」
彼の中で今まで積み上げてきた何かが、ばらばらと音を立てて崩れていった。

今までのあの子の為に費やしてきた時間、あの子の苦しみを少しでも減らしてやろうと努力してきたこと、自分があの子を悲しませるようなことはあってはならないということ。
そしてあの子には母親がいないということ。
「そうだ、お前は人殺しだ！」
タームはテイフを思い切り睨み付けた。
テイフはだっと凄い勢いでその場から駆け出した。タームはその場で勝ち誇ったようなどす黒い笑みを浮かべた。ウォーシュは為す術を失ってただ茫然とした。

私は嘘をついていた。あの子を傷つけないために。
でもそんな生温い思い遣りを押し付けて、取り返しのつかないことをしてしまった。
あの子が信じられるのは、身を委ねられるのは私しかいないのに、その私が彼を一番初めに裏切った。
彼の心の中を、足早な乾季の夜の闇が黒色に染め上げていった。

その後タームは父親から酷い罵声を浴びせられ一晩中叱責を受けたが、彼は悪びれる素振りも見せなかった。乳母はその場で只管泣き崩れていた。
ウォーシュはアートに命じられテイフを探しにいったが、外へ出て行ってしまったらしい。結局その日は明け方まで彼は帰ってこなかった。

彼はその日の夜は一晩中、テイフを探し回っていた。そしてまるで泉の無い砂漠に一人迷い込んだように、夜の闇の中で行くあてもなく彷徨い続けた。
テイフよ、一番初めにそなたに謝らなければならないのは私だ。彼はもう情けない気持ちで一杯だった。
心の中に様々な記憶が怒涛のように押し寄せては、洪水となって頭

の隅々までも巡っていた。そして振り払おうとすればするほど、一つのある記憶に帰着した。
アートからテイフの目付け役の命を与えられた時のことだった。
六年前、ウォーシュは酋長のアートから生誕の儀と夫人の死者送りの儀式が済んだ後、月が照らす夜の浜辺に呼び出されたことを鮮明に覚えていた。
アートは二つの儀式を終えて直ぐ、十日以内に村人全員を広場に集めて宴を催す旨を、大臣たちを通じて伝えた。
側近である大臣達は揃って酋長を心配していた。まだ妻に死なれてから数日しか経っていないのだ。彼らは酋長の意図を読むことができなかった。
夫人が亡くなってから当分の間、酋長の反抗勢力の活動は膠着したままであることは想定されたが、主格の聖職者であるノックらの動向は不明だった。無為無策に行動を起こすことは危険だった。
ウォーシュは当時、宗教指導者として幾つも式典を掛け持ちして取り仕切り、死者の塔・ハイマトローやパルンの祭壇を忙しく行き来していた。それでも終始アートの様子だけは常に窺っていたが、アートは怒りも悲しみも見せず、ずっと無表情だった。
夫人の通夜の折、アートが見せた表情をウォーシュは忘れることができない。涙を一滴も零さないと謗りを言う者もあったが、あれは違った。
あの日、酋長とその親族や血族、夫人の遺族、従者、そして宗教指導者が付き添って、参列者の一向はかなりの人数になった。アートはテイフ以外の子供たちを全員連れていた。彼女の親戚や友人の中にはすすり泣きを始める者さえあった。
タームは当時十二歳だったが、母親が死んだことが信じられずに只管取り乱していた。涙を流しながら喚いたり、暴れ出そうとしたり

したので従者が止めにかかるほどだった。
ウォーシュは頃合を見計らって、御輿に乗せた布の塊を従者に取り出させた。持ち帰った遺物を生前愛用した服で包み、夫人の亡骸に似せたものだった。
しかしアートの顔は、まるで巡礼祭に使う木彫りの仮面のような侭だった。どの場面でも依然として、全く生気の感じられない顔をしていた。
ウォーシュはその様子を夫人の遺族が泣き崩れる横で、複雑な思いで見つめていた。

アートは取り乱すことができないのだ。子供の時から長年世話をしてきたことも有って、一番その心中を理解していたのは宗教指導者のウォーシュだった。
もしアートが今、妻の死という哀しみの波に呑まれ心を狂わせれば、忽ち村の主導を簒奪されるだろう。アートはその重大な責任から、自分の酋長という立場から逃れることができないのだ。私情を挟む余地など何処にもない。
しかし、ウォーシュそれが分かる一方で、村人が酋長を非情だ、冷酷だ、という声も知っていたが為、尚更どうにもしてやれない悲しみが一層募るのだった。

それから数日して、集会が開かれる日となった。
夕刻ともなり日が傾き始めるにつれて、人の影が疎らに見え出した。三々五々と散らばっていた人が、段々と広場の中心に据えられた巨大な焚火を中心にして集まった。しかしこうして全員を集めても村人の数は五千を割っており、ケン族の弱小さを物語っていた。
そして完全に辺りが暗くなった頃、大体皆が揃った所で酋長も邸宅から顔を出した。
酋長は辺りの面々の様相を見渡すと、立ち上がって手を叩き注意を促した。そして宗教指導者のウォーシュを連れて、静かになった村

人たちの前に出て行った。
酋長はまず挨拶をすると、第五子が無事に誕生したことを報告した。この時ばかりはウォーシュもかなり緊迫した面持ちで望んだが、村人はただ黙って聞いているようであった。
そしてその後直ぐ夫人の死没に際し、ウォーシュを先導に村人全員で彼女を追悼した。

やがてそれが終わると、村の女達が腕を奮って作った食事の準備がされた。
豪華な料理の数々が、火を囲み座って雑談に興じる村人たちにも振舞われた。
漁師達がその日に海から水揚げしたばかりの殻付き甲冑魚（ナイシュ）の煮込み汁。貝やその他の魚介類の和えもの、色とりどりの海藻といった副菜。そして海岸沿いに自生する椰子（ホト）の木の実の蒸かしに、雑穀を盛った主食が食膳に並べられた。
更には普段滅多にお目にすることの無い、穀物から醸造した酒が石作りの碗に注がれて成人した男には全員に出された。
　その日の夜長は遅くまで、老いも若きもそれぞれの仲間達と談話に耽っていた。そして女子供は歌い踊り、少々の盛り上がりを見せた。
しかしその一方で隅にいる特定の者達の間には、険悪な雰囲気が漂った。誰かが主に酋長に対する悪口雑言の数々を並べ立てているらしかった。
また夫人の両親は、最愛の娘を失って未だ数日しか経っていないのに、このような盛大な祝宴を行うとは何事だ、と言って泣き出していた。そして従者に連れられた酋長の子供たちは、タームを含め皆が一様に哀しみに暮れているようだった。
元服もしていない彼らに、母親を失った現実など受け入れられるはずもなかった。

ウォーシュはそんな彼らを遠めに眺めながら、敷かれた莫蓙(ござ)の上に足を組んで座り一人火守りをしていた。
風によって揺れる火は、彼の近くにまで十分な熱を伝えるほど強くはなかった。赤々と燃える炎が人々を照らし出している。
彼は夜の海から吹き寄せる風に寒さを感じて、背中に掛けていた毛皮を羽織り直した。毛皮は貴重だったので、宗教指導者といった一部の人間しか持っていなかったが、それを着ていても寒さは少々軽減されるだけだった。
最近は体がよく冷える。もう若くはない。
彼は自分の今まで酋長のアートに仕えてきた生涯を回想した。彼は時には信頼できる友人として相談を受け、時にはその師として教えを施してきた。
しかし彼はもう父親の寿命も祖父の寿命も疾うに過ぎていた。何時死んでも可笑しくは無い年齢である。今後も宗教指導者として遜色なく、その務めを全うできるかは甚だ疑わしかった。
めらめらと燃え上がる炎は、彼の顔にも深い陰影を映し出した。

何れにせよ、当分の間この二つの派閥の対立構造は変わらないだろう。
彼がそんなことを考えていると、一人の従者が彼に声を掛けた。
「ウォーシュ様、親方様が浜辺でお待ちに御座います」
海岸の方を見ると、ぽつんとした人影がここからでも辛うじて見えた。長身のアートでこそのことだ。
そう言えば食事が終わった後から酋長の姿がずっと見えなかった。やはり今日の宴には何か別の目的があったのだろう。
彼は杖をついて立ち上がると、満天の星空を見渡しながら酋長の下へと歩いていった。

夜の砂漠は、昼間とは打って変わって非常に寒かった。
彼が海に近付くに連れて砂は湿り気を帯び、藁を編んだ靴で踏むた

びしゃりしゃり、と小さな音を立てた。
集会所の方から大分離れてしまったので、騒ぎ声も届かなくなった。そして彼が辿り着いて歩くのを止めた時、周囲には波の音だけが響いた。
酋長のアートは、月を眺めながら暗闇に同化して佇んでいた。
「如何されましたか、親方様（レンハインチョック、ウェルチャ）」
彼はいつものようにそう尋ねた。
「おお……そなたか、ウォーシュ」
アートは此方へと顔を向けた。月明かりに照らされて、砂漠の民である河人独特の黒い肌が浮かび上がった。彼は伸びたその黒髪を潮風に戦がせていた。
引き締まった顔立ちをしたアートの首には、妻の遺品である首飾りが掛けられていた。
「今年も海からの風が強いな」
海からの潮風は、村の畑にも吹き付けていた。今年も塩害でまともな収穫が見込めないかもしれない、彼はそんなことを考えて少し心配になった。
「畑の作物の育ち具合が気がかりに御座います」
「今の所潮風を防ぐ有効な手立ては見付かっておらぬのか？」
「はい。村人達に防砂の植樹を奨めてはおりますが、塩害の方は依然として手を焼いております。井戸の真水も乾季の間に尽きてしまわぬように、節約を呼びかけております」
「然様か。全てはここが元々、耕作には向かぬ土地である故だ」
かつて我々が河人の祖先たちがこちらへ移住して来た当初、彼らが最も苦しめられたのは、容赦無く照り付ける強烈な太陽光、作物の育たない膨大な砂の大地、そして海から吹く潮風だったという話を、どこかで聞いたのを彼は思い出した。
星明かりは僅かな火を灯しながら、二人を照らし出していた。アートは暫しの沈黙の後、彼の顔を見つめて間合いを取り、吐き出すよ

うにこう言った。
「そなたは今の時世をどう思う？」
今度はウォーシュが静かになった。やはり一言では表しがたく、様々な思いが交錯して言いたい事が頭に思い浮かんでは消えた。
アートは悩んでいる彼の顔を見てふっと安堵した顔になった。
「先ほども村の他の者達を呼んで、同じ様に話しを聞いた。しかし直ぐに答えを出さずにいたのはお前だけだ、正直者よ」
「申し訳御座いません」
「村人の目を気にして言い難いというなら、心配は無用だ」
アートは村の方へと首を向けて、こう言った。
「そろそろ酔いが回ってくる頃だろう」
彼は集会場の焚火の方へと目を凝らしたが、大半の男達は酔い潰れてその場で寝転がっているか、妻や親族の手を借りて漸く起き上がり家へ帰ろうとしているばかりだった。

彼が人前で私的な意見を口にするのを嫌っていたことを案じて、アートはこうして配慮していたのだった。彼は酋長の取り計らいに感謝し、気を取り直して自分が今知っている限りの情報を話した。
「降臨暦一一八九年にハシュ族が河陵の覇王に対し宣戦布告をしてから、今年で十二年目となります。
これは暴君レントの暗殺より、長年逆賊として烙印を捺されてきた河人の首魁であるハシュ族が、その汚名を雪ぎ、三大聖徒パルンの血を受け継ぐ子孫としての地位と名誉の回復を求めたことに因ります。
しかし無論神殿も学院もこれを認めず、覇王は討伐戦争と称して河陵全体に対し首都広府に馳せ参ずるように命ぜられました。そして全土から募った有志と、王立軍を率いてこれを破り、叛乱を鎮めたので御座います。
これが分離独立戦争の一連の動きになります」
アートは時折頷きながら、彼の話を静かに聞いていた。

「これまでもハシュ族と覇王との紛争は度々起こってきました。彼らの強硬な態度には、河人たちももうこれ以上我慢ならないのは熟知しております。

しかし今回私は陵人側に隠された意図があるように感じられてなりません。学院は何かを恐れているかのように、過剰に警戒を強めております。

三十年前のこともそうです。神殿の宝物殿が嵐（ゴエム）の被害に遭った時、学院は覇王と神官以外の全ての人間を神殿から締め出しました。この様なことは学院始まって以来に御座います」

普段人前に立つ割には物怖じして、雄弁を奮っているように見えても、結局は自分の意見を素直に述べることのできない自分。

彼はこの年になっても全く臆病だったし、宗教指導者としての器ではなかったのではないかと、悩みの尽きる日は一度もなかった。

だからこそ彼は、もういつ自分が死ぬ事になるか分からない今、宗教指導者の顔という立場へ精一杯の抵抗を試みていた。

「河人は今こそ、新しい指導者の下に集うべきです。

しかしその為には一刻も早くハシュ族による戦乱を治め、学院、そして覇王の御座す神殿との関係を修復せねばなりません。我々は真実を知らねばならぬので御座います。

先代の覇王チェタスは河人に対する圧力を強めておりましたが、それは現行の覇王の政策にも引き継がれております。ハシュ族はそれに益々憤慨して戦争への気運を高める一方です」

「神殿と学院による支配体制が成立してからも、戦の尽きる日は来ない」

「挙句の果ては、我が村の内部での後継者争いで御座います」

これが今の河人、そしてケン族の現実なのだ。もう現実を見つめなくてはならない。

「全く愚かしいな」

「私から申し上げられるのはこの程度になります」

彼はそう言って長い話を終え、一息ついた。

アートの顔色を窺いながら、まだ何か言うべきことがあるかと迷った。
彼の話しを最後まで聞き届けたアートは、ただ口を真一文字に結んで黙っていた。彼は自分の言動が酋長の気に触れたかと思って、一瞬恐怖さえも感じた。

ところが、アートが彼に対して口にしたのは思いがけないことだった。
「儂はそなたをテイフの目付け役にしたいと考えておる」
彼はこれには心底驚いた。
恐らくその内直ぐに、子供の教育係である目付け役を誰がやるかは、寄り合いの時に酋長の口から指名があることは分かっていた。
彼はてっきりタームのように乳母がその侭目付け役として、身の回りの世話を一任されるものと思っていた。
自分よりもずっと若くて身軽な乳母の方が良かろう。彼は一人で納得していた。
しかし彼は、まさか自分がそうだったとは夢にも思っていなかった。
「お言葉ですが親方様。私めはこの村の宗教指導者とは言え、広府の学院から都落ちした一介の聖職者に過ぎませぬ」
彼は少々焦る気持ちを抑えてこう言った。
「皆より敬われるのも、年長者であるが故。なけなしの才を衒い、賢しら口を叩くだけの老いさらばえていく身に御座います。それにも関わらず、何故私をお選びに御座いますか？」
「そなたは儂が知る限り、ケン族の誰よりも冷静に世を見通す目を持っておる。
それにそなたが居なければ、儂は跡取り息子の一人として代々続いてきたケン族の首領を務め上げることは出来なかったであろう」
「親方様、それは余りに身に余るお言葉に御座います」
彼は申し訳なさそうな顔を浮かべた。

アートは彼の様子を見て、憂いを帯びた微笑を見せた。
「儂がケン族の酋長の座についてから、何十もの星霜を送った。派閥の頭領としては十人並みに取計らい、威厳も貫禄もそれなりに付いたかもしれぬ。
しかし儂には一つだけ心残りがある。それは他でもなく、世継ぎの問題だ」
彼はそこまで聞いて、酋長の言わんとすることに察しがついた。
「先日に行ったテイフ生誕の儀の折、パルンの祭壇であの子の名前を考えながら、長年この戦いの中で忙しく駆けずり回ってきた我が人生を思った。
そして我が子息の世話を妻に全て託し、継嗣の養育というものを見縊っておったことを、その時になって後悔した。妻には苦労を掛け通しだった。タームの事も、全ては儂の至らなさに尽きる所となっておる」
今まで幾度も村人の中傷や嫌がらせに耐えながら、家庭でも父親としての威厳を保ちつつ、更にはハシュ族と河人の間を取り持つ。
これは聡明で温和なアートでなければできなかったことであろう。
誰がアートにそれ以上のことを要求できただろう。彼はアートの心持が手に取るように解かった。
アートの胸元には、独特の輝きをもった歪な石が輝いていた。
「しかし新しい男児を授かった今、同じ失敗を二度繰り返すことはできない。
儂はあの子を、このような小さな村で終わる男にしたくないのだ。
この意味はそなたであれば分かるだろう」
「それは……テイフ様を酋長にされる御積り、ということですか？」
アートは周りを見渡し、その手を前にぬっと突き出した。彼の心臓は一気にその動きを早めた。
普段ならこれはそれ以上の言及を厭うという意味だったが、今回

は質問の内容が肯定されたと受け取って良かった。
　彼はその場に跪いて立膝の姿勢をとった。アートは彼へ言い放った。
「そなたはこの大役を引き受ける覚悟はあるか？」
「親方様の命であれば、このウォーシュ謹んでお受け申し上げます」
「あの子の周囲にはその平穏を脅かす者どもが犇いておる。人より気苦労も多かろう。
そうした時はお前が支えてやるのだ、ウォーシュよ」
「畏まりました」
「下がれ」
　アートは彼にそう告げると、夜も更け篝火のもう消えた村の方へ向かって戻っていった。村人たちは全員がそれぞれの家に戻り、皆寝静まる頃となっていた。

彼はその場で蹲踞した侭、自分が任された責任の重大さを時間が経つに連れて湧いてくる実感と共にひしひしと覚えた。そして月光満ちる砂浜で、酋長が言った言葉の意味を反芻しながら、テイフとの今後を漠然と思い描いた。
　本当に私に勤まるのだろうか、その時は不安が尽きなかった。
だがもう引き受けたものは辞退する訳にはいかない。彼は今までもう既に酋長側へ自らの一生を捧げてきていた。この先も此の儘忠誠を尽くすことを思えば、腹を括ることが出来て良かったかもしれない。
こうして彼は、自分がこの先もまだ行き続ける決意を新たにしたのだった。
しかし彼はこの時はまだ、その後テイフに圧し掛かる苦難が並大抵のものではないことを未だ知らなかったのだ。

酋長が自分に託したことの重さを今更になって自覚して、彼は頭を抱えて項垂れていた。

彼は絶望を拭い去れぬまま、あの時と同じ様に頭上に広がる漆黒の天球を見上げた。
雲の裂け目には星の光に照らし出され、群れを成して飛ぶ聖獣たちの勇壮な姿が浮かび上がっていた。

テイフは次の日の朝になって、農園主のテップに連れられて砂だらけになって帰ってきた。農園の果てに近い場所でじっとしていたという話しだった。
酷い顔をしていたが、取り敢えずは無事に戻ってきたのが何よりだった。彼はテイフにもしものことがあったらと考えて、昨日は一睡もできなかった。
彼はテップがどうやって説得したんだろうと思いながら、テイフに声を掛けた。
しかしテイフは家に入ると、その日は一日中自分の部屋に篭り続けていた。そして地面に座り込みただぼうっとしていた。
彼は何とかテイフの気分を変えさせようと、横で昔話を聞かせたり温かい料理を持ってこさせたりしたが、あまり効きそうになかった。
結局二日後の旅行当日になって、彼の求めに応じて何とかテイフを外に連れ出すことができた。

巡礼祭の一行はケン族の人口の一割にも及ぶほどの多大な人数で構成されていた。家族との数ヶ月の別れを惜しみ、挨拶を交わす様子がそれぞれの家の前で見られた。
村総出の大移動だった為、村人たちは準備に追われて駆け回っていた。
それぞれが移動式の天幕や、一月にも及ぶ旅行の日程で必要な食糧を荷物に担ぎながら歩いて行くことになった。
酋長が一旦巡礼に参詣する人々を広場に集めた。彼らの多くは見るからに重そうな背嚢を背負い込んでいた。
「ケン族の同胞たちよ、ここから先は長い旅路となる。危険を伴う

為、皆が一致団結して問題に対処するように」
そして酋長を先頭に、まるで蟻の行列のように砂の中を続いていく人の群れを、村に残ったものたちが見送った。
こうしてケン族の巡礼の旅路は始まった。

彼がテイフを眺めている内に、周囲の景色は焼きしめた繊維を編んだ天幕の群れを抜け、次第に畑へと変わっていった。
テイフは始めの内は相変わらず下を向いていた。
ウォーシュはそれを見ながらテイフを気の毒に思うと同時に、自分のことをさぞかし憎んでいるだろうと考えていた。
しかしテイフは少々元気を取り戻してきたのか、いつものように疑問に思ったことを尋ねてきた。何かをしきりに探すように、きょろきょろと周囲を見回している。
「爺、あそこに幾つも並んで開いている穴は何だ？」
「井戸（シュウェム）に御座います。山州奥地の水脈から水道を掘り、ここまで井戸を幾つも設けて引いているのですよ」
テイフが頷きながら尋ねてきてはいたので、ウォーシュも知っていることをなるべく話すようにした。そして同時に、自分を嫌っていないことに安心していた。
テイフはまだ同じ村の中なのに、いつもよりも様々なことを訊いてくる気がした。
「山州には雨はあまり降らないのか？」
「今は乾季（ウォイム）でございます。後数ヶ月後に始まる移行季（ラン）の中旬になると、雨が再び大地を潤す季節が来るのです。
山州は大きいとはいえ島に御座います。水はこの地にとっては貴重なものなのです」
「ふうん」
まだあの子には早すぎたか、とウォーシュは思った。そしてつい話し過ぎて長話になってしまう癖のことを案じた。
「山州深部の脊梁、霊峰高城山（エウシュ・ケウクロイト）を頂く天上山脈（エウシュマル・ガトフォール）は其の麓に地下水脈

を有すが、全ての渠水は中浦(モアンゲール)へ通ずる。中浦は森羅万象の源泉なり」学院(カッピーシュ)で暗唱させられたそんな文句が、年老いたウォーシュの頭を過ぎった。彼は何かを忘れるように、年代記の一つ一つの文句を曖昧な記憶を頼りに口ずさんだ。

しかし、彼がそんなことを考えながら村の道が尽きる場所に差し掛かった時だった。

テイフが次に訊いてきたことに、彼は答えることができなかった。

「あの砂から突き出しているものは何だ?」

彼はテイフが向いている方を見てはっとした。それは死者の塔だった。

気が付くと彼らは村の西外れにある、無造作に何本も聳えた死者の塔に臨んでいた。

死者の塔はケン族を含む河人の言わば墓場だ。彼らは墓を作らず、火葬もしない。祈祷を終えた遺体は、砂から突き出した塔上部に安置されることになっていた。

儀式を初めて参列したときのことが鮮烈に蘇った。

聖獣たちが儀式の終わる前から弧を描きながら塔上空を舞う様子。帰る段になって両親から、決して塔の方を振り向いてはいけない、と言われたこと。

そして、立ち去ろうとする彼らを追いかけるように、後ろから聞こえてくる猛獣の唸り声と共に衣服や肉が引き千切れる音。

「どうしたのだ、爺?」

彼は飛びそうになった意識を取り戻した。冷や汗が頬を伝っていた。

「申し訳御座いません、あれは死者の塔に御座います。あそこは葬儀を行う所になります」

彼はどうにかして平常心を取り戻し、落ち着いたふりをした。

「あれは死者の塔というのか」

「然様で御座います」
テイフは妙に腑に落ちたような顔つきをしていたが、気にしているようでは無かった。
彼は何事も起こらなかったことに胸を撫で下ろした。

この村では人は死んだ後に聖獣に食われるのですよ、などと、今のあの子に何と言って説明すれば良いのだろうか。
河人は聖獣を古来より崇めてはいたが、今となってはそんな信仰も意味を成していなかった。聖獣が死んだ人間は愚か、生きている人までをも襲うようになったからだった。
この村の人間は聖獣たちの暴虐を長年許してきたのだ。
彼とてこの習慣は好きでは無かったし、初めて知った時も幾ら伝統とは言え受け入れられなかった。事実、陵人は学院の教えでこれを嫌っていたため、酋長側についていない若者たちの多くも、聖獣を厭うようになってきた。
しかし、まだこんな子供にそれが理解できると言うのだろうか。それとも自分は、あの子がそ知らぬ他人によって真実を知らされるまで、また性懲りも無く嘘を吐き続けるのか。
彼は自分がテイフについてきた欺瞞の数々が、一つ一つ段々と明かされていくことを怖がっていた。

そこからは何日もの間、単調な景色がずっと続いた。四方どこを見渡しても、果てしない砂漠が延々と広がった。
強烈な太陽光が周囲を照らし、辺りを覆い尽くす砂は人々の間にも吹き過ぎていた。人々は布を被って砂と光を防いではいたが、暑いことに変わりはなかった。
日が経つに連れ、なるべく太陽光の強い日中は動き回るのを止めて、夜に移動するという生活習慣が定着していった。昼は洞窟や砂を少しでも防げる場所に皆で固まって休み、夜は砂の中を歩き続けた。

彼は旅の途中、子供たちを夕暮れ時に集めてこんな話しをした。
それは彼が学院で学んだ河陵の民の歴史を、ケン族の言葉に置き換えたものだった。毎年この時期になると、彼は子供達にこうして話をするのだった。
夕食が終わり、並べられた天幕の中ほどに設けられた広場に子供たちが座り始めるのを見届けると、彼は抑揚を効かせて伝承を語りはじめた。
「かつてこの地上がまだ混沌としていた頃、天は愚かしく争いを繰り返していた人間達に三人の聖者を遣わせた。
彼らは陵人たちの言葉でパルン、マナウ、ファティムと呼ばれている。
地上に降り立った彼らは程なくして、山州中央部にある中浦の辺で「光(ハシュ)」、「水(アム)」、「風(アウ)」の霊魂(エイル)を与えられて、地上を統べるようにとの啓示を受けた。
彼らは迷える民を正しき教えの下に導き、神の化身として崇められた。そして彼らは何時しか民から三大聖徒(アイフデウメイル)と呼ばれるようになった。
三大聖徒は愚昧だった人間たちに仁道を説いた。後継者を育成し、彼らに代わって地上を治めさせるためだった。
やがて教えを受けた者達の中に、怜悧かつ英哲な頭脳を持ち合わせ、民を率いることのできる者が現れた。三大聖徒はその晩年に民の中から彼を選び出し、神殿を治めさせたという。それが初代覇王となった、陵人アサム族のウモシュであった。
ウモシュは神殿の他に、三大聖徒の言葉を受け継いで後世に学問と言うものを教える場を設けた。こうして学院という組織が誕生した。以来地上の民は、学院と神殿という二つの組織によって治められるようになったのだった。
現在パルン、マナウ、ファティムの後胤はそれぞれ、河人、陵人、そして北方の少数民族である炎谷(ティーキル)人と名前を変えて、今に至るとのことだ。

そして我々には今も、河人の祖パルンが掴みとった光の霊魂が宿り続けているのだ」
彼は話をしながら、他の村の子供たちに紛れて座っているテイフの様子を瞥見した。テイフは普段より生気が無かったが、一応話しは聞いているようだった。
彼は日中も彼の横についてずっと彼と行動を共にしていたが、口数が少なくなっていた。テイフは疲れの所為もあったかもしれないが、彼は益々テイフが遠ざかっていくような気がした。

旅を始めてから十五日、天上山脈が砂丘の遥か遠方に見え始めた。
すると、数珠に繋がれた鏡を首飾りにした人を先頭としたもう一つの集団が見え始めた。
他の村からの巡礼祭の一行らしい。
鏡はパルンから授けられた知恵の一つとされ、河人が好んで家宝とするものだ。これを首に下げるというのは、これから聖地巡礼へ向かうということを意味していた。
「同胞よ（ルーチャ）」
酋長のアートが内陸からやってくる部族に向かって手を振り叫んだ。
すると彼らの代表も大きく手を振り返した。河人たちは同じ人種の部族に出くわすと、こうして挨拶を交わすのが常だった。
他にもそうした集団は数多く見受けられた。巡礼祭の一行は各地から集結しているようだった。

山麓に入るに従って今までの砂だらけの風景は一変し、巨大な岩石と転がる大小様々な石や礫が地面に目立つようになってきた。
天上山脈には数多くの山があったが、聖地のある高城山はその中でも最高峰とされ、険阻に聳立する気高いその勇姿は、河人からは究竟の難所として畏れられていた。
勾配が激しくなり傾斜した大地が、巡礼祭の一行の行く手を阻んでいた。しかしここを登り切りさえすれば辿りつけるので、ここぞ

とばかりに彼らは最後の気力を振り絞った。
　しかしそんな登山の途中にも、部族間での小競り合いが惹起していた。
登山を続けていると、山の中腹辺りから男の怒声が響いた。そこからかなり下にいる彼らにも、十分聞き取れるほどだった。
　恐らくはハシュ族とその他の部族だろう。やがて口論から殴り合いになったらしく、叫び声が続いた。彼らは争いを止める気配を見せなかった。
ウォーシュは半ば呆れていた。河人は今内輪で争っている場合ではないのに、彼らは恥じるべきだ、彼はそう思った。
彼は座って休んでいるアートの傍らに行った。
「少し騒ぎがあったようです。どうされますか？」
「ここで暫く休憩だ」
「様子を見に参りましょうか？」
「必要ない」
　アートは複雑な面持ちのまま村人たちの前に立つと、一旦立ち止まることを命じた。ケン族の一行は休憩を取るため、あまり条件が良いとは言えない、せり出した岡の上に座り込むことになった。
　ウォーシュは、僅かな時間アートと話をするのに費やした。
「凡そ四百年前、第十七代覇王レントが本来人の住まぬ地であった西部砂漠に河人を移住させ、独立を謀ったというあの忌々しい過去から、河人は首都である広府、聖地の中浦のある東岸へと戻ることを許されなくなった。
海と砂漠しかない山州西岸に残される形で定住することとなったのだ」
「自分たちを騙したと言って、まだ恨みを抱いている部族も多くおります」
「レントは最期自分が創始した宗教に心酔して心を病み、陵人の原理主義者に暗殺されたそうではないか。ハシュ族の神官たちは未だにそれを信仰しているという……」

「しかし元はと言えば河人全体にも原因は御座いました。ハシュ族ばかりを責められません」
「そうか。だが我々がハシュ族との付き合いを続けることを、彼らに迎合していると受け取る者たちは、他の河人たちに留まらず我が村にも増えてきておるのだ」
アートは岩の上に立っているテイフをもう一度眺めた。
テイフは彼の隣で静かにそれを見ていた。

登頂は途中急勾配を避けた迂廻路を経由して、斜面での逗留を余儀なくされながら凡そ五日に渡って続いた。
ケン族の民は草木の殆んど茂らない山道を、河人の他の部族たちが隊列を成して行く後ろを追って歩いていた。
地形が普段暮らしている地域と非常に異なった様相をしている為、彼らは足で歩き進めるだけでも難儀していた。従者の女達の中には疲労で身動きがとれなくなったものも出ていたし、男達も肉体面での疲れが頂点に達しようとしていた。
ウォーシュはテイフの手を取って歩いていた。彼は切り立った頂上を眺めながら、無心になって歩調を崩さずにいることだけに集中していた。
上へ上へと登るうちに増してくる寒さ、呼吸には適さぬ空気に耐えながら、雲海を通り越して遥かに登頂を続けると、頂上の噴火口(ほこら)が見えてきた。そして、その横に建てられ火山岩を積み上げた祠が見えたとき、ケン族の男たちの間に喚声が上がった。
とうとうパルンがかつて実際に足を踏み入れたと伝わる聖跡、光石(グルハシュ)に到着したのだ。

彼らはここが山の上であることも忘れて、大急ぎで山頂へ走っていった。酋長やその従者もそれに続いた。
山頂は既に各地から集まった参拝者でごった返していた。そしてそれぞれが中央部にある、天蓋に覆われて祀られた岩の前で祈りを捧

げていた。
まず彼の目に映ったのは、中央部に円形に近い形に切り取られた、夜空を貫く星々の道・カイヒンバルのように細かい光を反射して輝く不思議な岩だった。
千年以上前に作られたという、石を隙間無く積み重ねた古いお堂。そして伝統の高貴とされる白色の民族衣装を纏い、陵人とも同じ様に霊魂信仰を続ける河人たち。
何もかもが昔と変わっていなかった。
彼は今までにもその長い人生の中でここを幾度も訪れたことが有った。
しかし今でもこうして、河人たちのパルンの子としての自覚が完全にはまだ忘れ去られていないことを誇りに思った。
ハシュ族との関係は修復できない、しかしそれ以上に河人だという思いに強く突き動かされて、聖地へと足を運ぶ者たちがいる。それはとても心強いことだった。
彼は人ごみを掻き分けて、柵に囲まれた岩から少し離れた場所で酋長のアートと並んで話しをした。ウォーシュは人が前より少なくなったと感じた。
その時のテイフは彼らの会話などつゆ知らず、あちこち見渡して色々な所に興味をそそられているように彼には見えた。

ウォーシュは岩の前でパルンに祈りを捧げた。
それと同時に彼は自分の残りの人生を鑑みて、今年が最後の参拝になるかもしれないと薄々感じていた。それまでに戦争は終わるのだろうか、村人たちは争いを止めるのだろうか、そういった不安は尽きなかった。
彼が目を閉じて懸命に祈っていると、テイフがそんな彼の袖を掴んだ。
何事かと思って振り向くと、テイフの顔はいつもと違っていた。
「若様、ここが母上様の通られた道にして、河人の魂の故郷に御座

います」
　ウォーシュはそう言って巨大な岩の方を指差した。テイフは今まで内乱でここを訪れることができなかったのだ、きっと心に残るはずだ。
しかしテイフは何か不安を抱えたような顔をして、彼に一つの質問をした。
「一つ、爺に問うておきたいことがある」
「何なりとお申し付け下さいませ」
「我々が今暮らしている西部砂漠は、水も少なく、作物も育たぬ土地だ。そして果ては聖獣たちに襲われるのに怯えながら、どうして何百年も住んでいるのだ？」
「ハシュ族出身の嘗ての覇王、レントが河人の移住を奨励した為に御座います」
「そいつか、レントというのは」
　テイフは何かを知っているような口を訊いていた。ウォーシュはテイフを窘めた。
「若様、お言葉を慎みなさいませ」
「そのレントとかいう王が山州の西へ移り住みさえしなければ、我々は今こんな土地で暮らすことはなかったのではないか？」
「お止めになって下さい」
「我が母上とて聖獣に喰われずとも済んだのではないのか？」
彼ははっとして、全てを悟った。
あの日、テップがあの子に母親のことを話したのだ。あの子は旅路の途中ずっとそのことを知っていて、自分に話し掛けてきていたのだ。
「奥方様は、ケン族に代々伝わる方法で葬られたので御座います」
「もうそのような物言いは止せ。何故だ、何故そのようなかわいそうなことをするのだ？」
テイフは憤りや怖れともつかない負の気を全身から漂わせていた。
「聖獣の怒りを少しでも鎮める為に、死体を捧げるので御座います」

彼は周りの人に自分の声が漏れていないかを確認した。
「独立騒動の前、河人は山州の東岸、高城山の麓を中心に住んでおりました。そして我々が今暮らす西岸は人間の住む世界ではなかったのです。
あの岩はその昔、人界の果ての境界を表す標識を意味していたので御座います。これの意義が分かりますか？　かつて西岸を支配していたのは聖獣だったのですよ」
テイフは彼が何時に無い形相で捲くし立てる様を、目を見開いて聞いていた。
「聖獣は三大聖徒が降臨する前は、山州全土にその生息域を広げておりました。
そうした中で、三大聖徒パルンは聖獣の首長、長老（アイファン）との戦いの末に、山州東岸を人間、西岸を聖獣に支配させるようにされたのです。
しかし覇王レントは、その数百年来の禁を破ったので御座います。聖獣たちはそれを許さなかったのです。これはケン族を含む河人の宿命に御座います」
「爺も、そうなるのか？」
彼は血の気の引いた顔をしているテイフを前に何も言えなかった。彼は自分が死んだ後のことなど忘れていた。しかし考えてみれば、テイフの言う通りだった。
「静かにしろ」
そこで止めに入ったのは酋長のアートだった。
アートに促されて周りを見ると、祠の入り口にハシュ族の行列が来ていた。
ハシュ族の王エアは他のどんな部族のものよりも豪華に着飾っており、行列は神々しくさえ見えた。エアは覇王（オフォス）ではないのに、王を僭称していることで知られていた。
そしてケン族の大臣たちがそれを見て地面にひれ伏しているのが分かった。しかし、彼に対して何の挨拶の素振りさえも見せない人々も大勢いた。河人の結束はここになって一気に乱れ、部族によって

対応は二分していた。
ハシュ族は何故争いを止めぬのだろう、彼は率直にそう思っていた。
彼らが何かを秘匿していることだけは事実だった。
アートはテイフに頭を下げるように言った。
「あれがハシュ族の王か？　何故我々はかの者たちに頭を下げるのだ？」
「テイフ、いい加減にするんだ」
アートは諌めていた。一方で地面に跪いているウォーシュの頭の中を、テイフは他の子よりも多くの苦労を背負うだろうという酋長の言葉が思い出された。
テイフは物事に聡い余り、この年にして様々なことに気付き過ぎていた。

この時のことをテイフは後に振り返って、自分が生まれた村への認識が一気に変容した時だったと記した。そして更にはこの年を、自我の萌芽の歳と位置づけた。
思えば、復讐の炎はこの時には既にテイフの心の中に小さな灯火となって宿っていたのかもしれない。

「おーい、こっちに来てみな」
「分かった」
声に応じた一人の少年が、石槍を片手に海に向かって飛び込んだ。
バシャッという大きな音が水面との境目に弾け、白い泡と共に水飛沫が舞った。

あれから六年と数ヶ月の月日が経った。テイフは元服の十三歳になろうとしていた。
彼は十歳頃から漁りに夢中になり、度々村の彼を懇意にしている漁師たちと船で沖に漕ぎ出しては魚を追いかけていた。

決して長身でもなく、浅黒い肌と男子にしては長めの髪は、真っ黒に日焼けした逞しい体つきの「海の男たち」の間では少々目立ったが、彼はそんなことは気にかけていなかった。
洋上には他にも何艘かの舟が漁に出ていた。照り付ける太陽の光は波間に揺られて、煌く網目模様を浮かび上がらせていた。
彼が戻ってきた息継ぎの為に戻ってきた。彼は水面に出るなり、口に溜まった塩水を吐き出した。
「今日の漁獲量の具合はどうだ？」
海から顔を出した彼は、舟の縁に座って船底の水を掻き出していた漁夫に尋ねた。微風で波はあったので舟は揺れていたが、漁夫はその上でも立っていた。
「昨日よりちょっと少なめだけど、ちゃんと捕れてるよ。安心して下さいって」
「そうか、我の働きが少しは足しになっているか？」
「いやいや、若様はそんなこと気にしないで、楽しんでくれりゃ良いんだ」
テイフは水を滴らせながらそれを耳にして笑うと、もう一度魚を捕ってくると言って再び海の中へと戻って行った。

冷たい水の感触と肌を伝う気泡が顔を撫でた。海は彼の五感の全てを刺戟した。
彼は目が眩むような青い海の中を泳ぎながら、手製の銛で甲冑魚（ナイシュ）の群れを追っていた。
甲冑魚は全身を固い殻に覆われた魚で、別名を「殻（ロウフ）」と言い、山州の海では一般的に見られる魚の名前だった。一括りにしているが多用な種族を有しており、形状や大きさは種類によって千差万別だった。
彼が今目を付けているのはゲック、群棲する甲冑魚で何百匹もの群れを成すのが普通だった。そして最も一般的な食用の魚介として、漁師達に捕らえられるものだった。

尖った角状の突起を持つのがロウトイン、細長い体つきのフワムなどが有名なものだったが、他にも数え切れないほど多くの沢山の甲冑魚がいた。
そして極彩色の珊瑚や巻貝、海草といった他の生物達も其処彼処に見られ、それぞれが生命を謳歌していた。
海の中はいつも陸で見るような風景とは違う、宛ら神秘的な風景が広がっていた。彼は日常の些事は忘れて、水の感触を全身で受け止めながら暫し感慨に耽った。
雨季の頃ともなると最盛期になるが、未だそれは訪れていない。彼らも忙しくなれば、俺の相手もしていられなくなるだろう。

ぼんやり潮流に漂いながら、彼が年上の若い漁師達が魚を舟から銛で突き刺しているのを見ていると、突然強烈な水圧と共に目の前を巨大な影が横切った。
アンガンだ。
　海の上から男達の叫び声が聞こえる。一斉に水の中に彼らが飛び込み、狩りとなった。
アンガンは極稀にしか揚がらない巨大な甲冑魚で、稚魚でも大人一人分ほどの重さがあった。思い出すことと言えば、ごつごつとした板皮の骨格が浮き出た頭と、全身に黒い鱗がびっしりと生えた様。幼い彼には恐怖でしかなかった。
前にも村の漁師がこれを仕留めて帰ってきたことがあったが、余りの大きさに村が大騒ぎになったことを彼は思い出した。その漁師は赤く裂けた生々しい傷を負っていて、村まで歩いてくるやいなや倒れて薬師の手当てを受けていた、というところまでは覚えている。
彼は追うかどうか迷った。
何せ海の中で生きたまま仕留めるのは、熟練の漁師でさえ死の危険を伴うのだ。
しかし彼が戸惑っている内にも狩りは続いていた。
男たちは物凄い速さで逃げようとするアンガンに、必死で包囲を掛

けようと泳いでいた。舟の上では、別の漁師達が投網を持って待ち構えていた。
アンガンはぎざぎざとした牙の並んだ顎を見せつけて威嚇しながら、椰子の葉は優に超す大きさの鰭で強力に水を掻いた。
彼らの普段とは違う真剣な顔つきは、テイフにも緊張感を伝染させた。
もしこいつに全力でぶつかられたら、一溜まりもない。彼は直感でそう感じた。

テイフは自分の横を通り過ぎて行った一人の中年の漁師に目をやった。
名前は分からなかったが、顔は漁でよく見かけたので知ってはいた。
背中に大きな傷があった為だ。
何があったのかは知らない。でもその男の眼光は、目の前の獲物だけを捕らえていた。
彼はほんの少し目を瞑った後、今は何も考えずにその後を追うことにした。

アンガンと男たちは、追いついたり追い抜かしたりを繰り返しながら、水中で何度も回転し、お互いに攻撃を避けながら前進していた。
そして水の中での決死の追跡の末、アンガンを水面附近まで追い上げることに成功した。
後は捕まえるだけだ、彼を含め漁師達の気も緩みかけたその矢先だった。
アンガンは追い詰められたことに気付くと、自分の四望をぐるりと眺め、突然、彼の方へ牙を剥き出しにして猛烈な勢いで襲い掛かった。
彼はたまらず全力を込めて足で水を蹴り、迫り来る狂気の塊を避けた。
するとアンガンはそれを見透かしたように、彼が元いた隙間を抜け

て更に沖の方へと逃げてしまった。
男達はその瞬間、口を大きく開いて悔しそうに眉間に皺を寄せた。
彼の喉下に、息をつく間も無く熱い気持ちがこみ上げた。

その日の漁はそれで終わりになってしまった。彼は舟を漕いで帰る途中にも落ち込んでいた。諦めて去っていく漁師たちを眺めながら、足手纏いになっている自分に嫌気が差したからだった。
アンガンが見透かしたのは、我が心だったんだろうか？
「気にする事はないよ、若様。あいつは、俺らみたいな漁師でも容易く捕まえられるようなもんじゃないから」
　同じ舟に乗っていた初老の漁師は彼を慰めた。彼は曖昧な顔をして、大丈夫です、自分こそ迷惑を掛けました、と言っておいた。
まだ海に潜るようになってから一年しか経っていない。自分ができることから段々と覚えていこう。今は大物に手を出すべきではない。
しかしいつかはこの手で奴を捕まえてみたい、彼はそう強く心の中で願を掛けた。

彼は黄ばんだ部屋着に袖を通して首飾りを身に付けると、浜辺にある器具庫に戻ってきた。すると、簡素な作りの荒屋の中から鑢で何かを削るような音が聞こえた。
先客がいるようだ。彼は簾をたくし上げ、石槍や銛などが立てかけられた壁を見ながら、奥まった場所で燃えている火の方へと近付いていった。
「来てるのか？」
　彼は火の前に座っていた誰かに声を掛けた。後ろ姿では、年は同じくらいだった。短髪で、彼よりもやや座高が高く見えた。
「テイフ？　帰ったんか？」
　その男子は手を止めて、首だけ振り返って答えた。最早黒に近い褐色の肌と、生き生きとした黒い目をした少年がそこにはいた。
彼に普通に話しができる人間といったら限られていた。

「やっぱりゴンか。こんな所で何やってるんだ？」
「見りゃ解かるだろ、鏃彫（やじり）ってんだよ」
ゴンと呼ばれた少年は漁師の息子だった。そして、彼の数少ない親友の一人だった。
ゴンは上半身裸で、焚火の前でずっと作業をしていた。彼よりもずっと筋肉質だった。
「親父何時帰ってくるって？」
「多分もう少ししたら。なあ、それ見せて」
「忙しい」
「ちょっとくらい良いだろ？」
彼はしゃがみこんで、手を伸ばそうとした。するとゴンは彼の手を払いのけた。
「今ロウトインの殻の表面磨いて、最後の仕上げやってんだよ！部品切り出すだけで、どれだけ時間かかると思ってんだ。ったく、一番集中したい時に来やがって」
ゴンはそう怒鳴ると、どうせもう片付けなきゃならないけど、などとぶつぶつと呟きながら作業を続けていた。
「こっちだって漸く漁が終わって疲れて帰ってきたっていうのに」
彼は拗ねた真似をして、隣に座ろうとした。しかしゴンの座っている周りには、工具や削り滓、そして石の欠片が散らばっていた。
ゴンは彼がそれらを踏まないように歩いているのを見て、その辺に落ちてるの触るんじゃねえぞ、とぼそっと言った。彼は仕方なく部屋の隅に腰掛けた。
石槍を傍らに置こうとすると、火の方を向いたままゴンは話しを続けた。
「言っとくけど、俺が釣り針とか道具とか作らなかったら困るのはお前らだからな」
「ふーん、金槌で海が嫌だから器具庫に篭ってんの誰だっけ？」
「お前な、こないだだって獲物逃がしただろ。この分だと今日もどうせまたやらかしたな？手伝いとか言って軽い気持ちで漁に出るな

よ」
図星だったので、彼は不愉快な気持ちになった。
「この野郎、お前こそ漁師の子だろ？」
「んだと」
ゴンが腕を振り上げて彼に掴みかかろうとした。テイフもそれに応戦しようとして、取っ組み合いになりそうになった。
「若様、ここにおられましたか。探しましたぞ」
ウォーシュの声が小屋の外から聞こえた。二人は慌てて互いの服を引っ張っていた腕を下ろした。
彼らが妙に大人しくしたところで、ウォーシュが部屋の中に入ってきた。心なしか、すり足でゆっくりと歩いている。
「おやまあ、ゴン君と一緒で御座いましたか」
「ずっとじゃないです、私が作業してる所に丁度来たんですよ」
ウォーシュは彼の作っている鏃を近くに来てじっと眺めた。
「それにしても立派なものですな。十三歳とは思えぬ出来栄えに御座います」
「ああ、これですか？　へへえ、そう思いますよね」
ゴンは鼻を擦りながら、悪戯っぽい笑みを浮かべた。テイフはその様子を見てゴンを羨ましく思った。自分には特技の一つもなかったからだ。
「材料などはどこで手に入れているのですか？」
「甲冑魚の殻はいうまでもないですけど、石は中々、この辺じゃ全く無いですからね。親父が言うには、えー、その、何でしたっけ」
「山脈麓の坑道で採れた黒曜石を主に使ってるんですよ」
別の快活な中年男性の声が外から聞こえた。
「あ、親父」
ゴンが変に裏返った声を上げた。簾を上げて声の主が入ってきた。そこには、褌一丁で水を滴らせながら立つ一人の漁師の姿があった。彼はふと自分の記憶の糸を手繰ってみて、ゴンの父親に会ったことは無かったということに気付いた。

「何でも、数少ない河人の部族から譲り受けてるんだとか」
「詳しいのですね」
「いや、こういうのって知らないと困るんですよね。あの辺りに学院がちょっかい出してるらしくて、鉱脈を陵人が独占してるんですよ。実際問題その所為で河人の職人やってる連中は皆苦労してますし」
ゴンの父親は話しながら投網を片付けていた。
「まあ地上で一番硬いですから、取り合いになるんでしょうけどね。ウォーシュさん、今日もテイフの坊ちゃんを探しに来たんですかい？」
ゴンの父親は火の側に胡坐をかいで座った。無精髭に手を伸ばして摩っている。
「ゴン君のお父様でいらっしゃいますか。日ごろテイフがお世話になっております」
ウォーシュがいつもの調子でゆっくりと言った。いつも通り礼装を着て、立膝で構えている。
そう言えば今日も漁に出ていたような、彼はアンガンに寄り添うように泳いでいた漁師の姿を思い浮かべた。彼は少々気まずいものを感じた。
「そんな恐縮ですよ。堅苦しい挨拶は抜きにして下せえって」
「そういう訳にはいきません」
「ハハハ、相変らずご丁寧にありがとうございます……それよりゴン、何でお前がここにいるんだ？」
「ああ、いやその……」
ゴンは明らかにバツが悪そうな顔をしていた。
「てめえ、また器具庫漁ってんのか？」
「親父、そういや俺これから母ちゃんに飯作ってやらなきゃいけねえから、先帰ってるよ」
ゴンは手元にあった工具を放り出すと、簾を上げて出て行こうとした。

「おい、お前ちょっと待ちな」
太い声がゴンを止めた。ゴンはぎくりとして立ち止まった。
ゴンの父親は膝元に置いてあった鏃に手を伸ばし、何やら注意深く触ってみたりひっくり返したりして、それをじっくり眺めた。
「こいつぁ、俺が作りかけてたやつじゃねえか！　どういうことだ！」
「うへえ、ウォーシュの小父さん、また今度！」
「あれほど勝手に細工するなと言っただろうが！」
テイフは状況を知って呆気にとられていたが、ウォーシュはにこにこしながらその様子を見ていた。笑いがこみ上げてきているようだった。
父親は相変わらず憤怒の表情を露にして、悪戯小僧の首根っこを掴もうとした。しかしゴンは父親の声を聞くなり、一目散に外に逃げ出していってしまった。
「ったく、しょうもない餓鬼だ」
「威勢が良くて宜しいことでは御座いませんか。私めも幼き頃はあのような悪さばかりしておりました」
テイフは、ウォーシュとゴンの父親が語らう様子を後ろから静かに見つめた。
後ろを向いた背中に斜めに走っている大きな傷が、若かりし日々の栄光を物語っていた。

「タームの成人と、テイフの元服……」
アートは夕暮れの陽光を一身に浴びながら、そう呟いた。舞い上がった土埃は、隙間から差し込む光線にさらされて、空中に何筋かの軌跡を描いた。
ウォーシュはどう話を切り出して良いか、解からなかった。
酋長宅に呼び出されて部屋に入ったは良いが、アートは立ち尽くしたまま窓の外をずっと見ていたからだ。
何故呼び出されたかぐらいは知っていた。ウォーシュはゆっくり

と杖を突きながら、腕を組んだまま動かない主人に向かって足を進めた。
「親方様」
「解かっておる」
会話が途切れてしまう。お互い言い出したいのは山々だが、アートは二人の息子を思うあまり、ウォーシュはアートを過度に気遣ってしまっていた。
圧倒的な重たい空気が、逆光で暗くなった部屋の隅々にまで立ち込めた。
しかし、先に口を開いたのはやはりアートだった。
「そなたは今年という年の意味を解かっておろう。儂もそれは解かっておるのだ」
ウォーシュもようやっと言葉らしいことを口にした。
「ターム様はもう既に二十五、テイフ様は先日十三になられました」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1349h/

光の洗礼

2010年10月9日06時37分発行